

## 宇都宮大学公開講座「地方自治体入門」のレポート集完成に寄せて

中村祐司（担当教員）

大学に居ながらにして少しでも地域の市民と接することができないかという思いから、昨年度以来、大学期の前期は「地方自治体入門」を、後期は「コミュニティ入門」を初めて開設し、手探りかつよたよた状態ではあったものの、幸い受講生に助けられながら両講座とも何とか完遂することができた。その意味では貴重な経験と僅かながらも講座運営の実績を獲得したことになり、今年度はその蓄積に立ち多少の余裕を持って、公開講座に臨むことができるという印象を当初は抱いていた。

ところが、そのような思いが講座初日から吹き飛んでしまった。考えてみれば、この講座は大教室での多人数を相手にした講演調の講義形式を採らないし、できない。そもそも「地方自治」、「コミュニティ」といったテーマ名自体が、教養講座的なものとは対極にあり、受講生には社会的関心を持つことを暗に要請している。したがって少なくとも今日までのところ、応募は少人数である。しかし、そのことが結果的に双方向の意見交換を土台とした、受講生と教員とが共に作り上げていくような講座内容を可能にしてきた。

裏を返せば、この講座では個々の受講生が持っている問題意識や関心がそのままストレートに反映してくるのであり、教員が置かれる環境はその年によって全く異なるものとなる。今年度の受講生が醸し出す雰囲気はこの点で、非常にユニークかつ強烈な側面を持っていた。要するに教員にとっては、前年度のスタイルが全く通用しない状況に陥ったのである。

具体的に言えば、その第一は、各々の受講生から多様・多面的かつ課題の核心を突いた質問が矢継ぎ早に出されたことである。研究者間のやり取りでは、あくまでも専門的知識の共有を前提にした上で、関連事項をめぐる周辺からの指摘を行い、核心部分を最初は「カムフラージュ」しつつ、じわじわと問題関心の本意に迫っていくケースがままある。ところが、この講座では、当該地域社会における生活実践者ともいべき日常の視点からの素朴で切実かつストレートな具体的質問が、概念的な領域を捨象する形で次々に発せられた。その迫りに毎回圧倒される思いがした。

もう一つ指摘しておかなければならないのは、学部学生をはるかに上回るような、何かを獲得しようとする強烈な意欲や受講姿勢に学ばせてもらうことが実に多かったということである。例えば、地方自治に関する専門用語にしても、分からないところは分からないという透明な意識を持つことがいかに大切かを痛感した。当該専門用語が意味するポイントについて知らず知らずのうちに曖昧なまま「カムフラージュ」していることに気づかされたのである。まさに研究者という立場に胡座をかいていたことになる。真摯な質問に対する回答の際の前置きとして「財政学者ではないので……」などという恥ずかしい禁句を発してしまったこともあった。ここに取り消し・訂正してお詫びしたい。何はともあれ、教員を含め地域社会に対する関心を相互に刺激し合う過程を経て、最終的には受講生個々の努力によって、ここにレポートという一つの貴重な成果ないしは痕跡を残すことができた。大変喜ばしいことであり、自分のことのように嬉しい。

2003年7月8日